
火車が棲む家。

imaiwa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

火車が棲む家。

【Nコード】

N4510Q

【作者名】

i m a i w a

【あらすじ】

ヤクザの彰はカニを法外な値段で売りさばくために、独り住まいの老人の家を求めて住宅地を彷徨った。

前田彰は高谷組の組員だ。

白髪の混ざった角刈りの頭を撫でながら、組長の私室の前で佇むと木目のある扉をノックした。

「組長、彰です」

「おう、はいれや」

組長の声に促されて室内に入った。

畳敷きの10畳程の部屋には4つ足の長テーブルが置かれている。その上には白い発砲スチロール製の箱が置かれていた。

「彰、ようきたな、ま、座れや」

「へい」

彰は不思議そうにテーブルの上の物体を眺めながら腰を下ろした。

組長はガハハと陽気に笑って、

「ちよっとお前にも頼みたいことあるんや」

「なんでっしやろ」

「この中のもんをな、捌いてほしいんや」

禿頭の組長は電灯でてかてかと光る後ろ頭を二三度叩くと、箱の上部の蓋をゆっくりと開けた。

「力ニやないですか」

「そうや、ある筋からちよっと仕入れてきたんやけどな、こいつを売って来て欲しいんや」

「はあ……」

「ここんどこ、組もカツカツでな、セコイ商売やけどこんなんでもせんと糊口もしのげん」

さっきまでの組長の豪快な笑みは既に消えていた。

彰を見る三白眼の双眸は、至って真面目で鬼気迫るものがあつた。近頃、警察の暴力団に対する締め付けは厳しさを増していた。そして、それに輪をかけたような100年に一度の不景気到来。

凌ぎの収入源も減ってきていた。

——もう仕事選んでられんわな。

彰は組長の苦しい胸の内を痛いほど分かっていった。

「任せてください、俺がしっかり売ってきますわ」

「頼むわ、お前は口うまいから、老人相手なら売れるやろう」

「もちろんですわ」

「俊三、てなわけなんや」

「兄貴、分かりやす、今はみんな協力して何とか食ってかないけまへん」

「だからよお」

彰はぎよろつと、何かいいたそうに弟分の俊三を見た。

俊三は彰の言いたい事は十二分に察知していた。

「今日、ちよつと老人の一人所帯が多そうな地区回ってきますよつて」

「おお、俊三わかつとるやんけ、んじゃ頼むわ、売るのは俺に任せとけ」

「ここか」

「へい」

翌日、彰と俊三は軽トラに乗って、俊三のリサーチによって選ばれた地区へとやってきた。

うらびれた家々が軒を連ねるこの地区は、一人住まいの老人が多く住んでいる。

幅のある道路を挟んだ、住宅街の向こう側は大きな工場になっている。

市の中心地から離れているせいか、人通りはあまりなく、時々高齢の女性が自転車で家に入っていくのを目にする程度だ。

「ええ場所やないか」

「そつでつしやる、老人てんこもりですわ」

「よくやった、後は俺に任せろ、こう見えても口は回るほうや」

「兄貴頑張ってください！」

車を降りると、彰は弟分を車内に残して、軽トラの後ろの積荷を両手で抱えて一軒一軒回る事にした。

「はーなかなかうまくいかんわ……」

額の汗を拭つて、彰は冴えない顔で独りごちた。

彰が考えている以上に訪問販売者への風当たりは厳しい。

不景気の最中、考える事は皆同じだった。

この辺りにも同業者が何度も押しかけていて、いくら思考能力の衰えた高齢者とはいえ、飛び込みの訪問販売員を簡単に受け入れる家はそうはなかった。チャイムを押しても大抵はカメラで中から確かめて、不審者やセールスマン風の間人であれば居留守を使って出てくようとはしなかった。

「次あそこにするか」

彰は薄暗い路地に入っていった。

そこは昼間だというのに、大きなパチンコのビルの裏にあるために太陽の光が届いていない。

細い路地の右側には鈍色の壁の似たような小さな家が続き、左側は公園になっていた。公園を縁取る木々から大きな葉が道路側に垂れている。通るものに覆いかぶさってくるように道に張り出していた。

——なんか不気味や……

薄ら寒い思いをしながら、重荷に感じ始めた荷物をくいと抱えなおす。

しばらく歩いていると、路地のどんづまりに、これまで並んでいた家より幾らか大きめの家を認めた。

彰も大分疲れていたし、法外な値段で売りつけるにしても腐ったカニでは後味が悪い。

——ここいくか

意を決して彰は、白い壁に設置されたボタンを押した。

「こんちわー」

「……………」

返事は返ってこない。

彰は途方に暮れていた。

黒い門扉を蹴りたい衝動に駆られる。

「他いくか……」

「にゃ」

反応がないので、諦めて踵を返そうとすると、足元に纏わりついてくる白い猫がいた。

「シッシッ」

彰は猫があまり好きではなかった。

つま先で軽く猫を突くようにして追い払う。

猫は驚いて、門扉の下部の隙間からこの家の庭へ入っていった。

白い猫は紅い首輪をしていた。

——この猫かなあ……

漠然と彰はそう考えながら、猫が入っていた軒先を眺めていると、
「あー、どなたかな？」

インターフォンから年老いた女性のしわがれた声が聞こえた。

黒雲が瞬時に晴れたように、彰の顔は明るさを取り戻した。

「ここではなんですから、できれば中で」

「はいはい、じゃ扉開けますんで」

彰は懸命にあることないと言って、商品の良さを伝えていると、
老婆はあっさりと中での応対を承諾した。

——入ったらこっちのもんや

彰は入れてもらえる事に最初は驚いた。

だが、入ってしまったえば売りつけるまでどんな手を使っても出るつもりはなかった。

いざとなれば、自分は現役のヤクザ。怖い顔と大きな声で相手を押し込める自信がある。

「さあ、どうぞ」

「どうも」

腰が折れ曲がった老婆が、意外と軽い足取りで出てきた。

その受け答えはてきぱきとしていて、老人にしては頭の回転も速そうだ。

老婆の肩口から奥をのぞき見る。

人の気配は感じられなかった。

——老婆一人ならなんとかなるやろ

そんな軽い気持ちで彰は白い積荷とともに中へ入った。

「10匹で100万円や、安いやろ」

「おいしそやね」

「どうや、買わんか！ 北海道のカニやで！」

彰は嘘八百を並び立て、強引に老婆に買うことを迫っていた。

老婆は特に困った様子を見せるわけでもなく、終始皺皺の口元に微笑みを湛えている。

ここに至るまで、相手は彰の言葉を合いの手を殆ど挟まず聞いていた。

まるで、疑うような発言をしてこなかった。

——お人よしやなあ……

彰はその唯々諸々とした対応に、なんだか老婆を哀れむ気持ちさえ芽生えていた。

——育ちがいいのか、元はどつかのお嬢様で世間知らずなんやろかだが、その途中で組長の顔が頭をよぎる。

——そ、そんな事関係あらへん、絶対売るんや！

「な、な！ ええカニやろ、買ってちょうだいな」

「私はええと思うんやけど、主人がどういうやろな」

彰は後一押しだと感じていた。

その時だった。

「あら、あなた」

「ご主人でつか？」

老婆の夫らしき爺さんが奥の間から扉を開けて入ってきた。

青白い顔の頬は痩せこけ生氣というものが感じられない。

「どなたさんかな……」

「あ、えつと」

彰は気後れしたが、もう後には引けない。

この奥さんは半ば落とせている。

妻を利用すれば、夫もなんなく落とせるだろう。

彰は強気でいくしかないと思腹を吸えた。

そして、老婆の夫を力強く見上げた。

その瞬間——彰はそれまでの氣勢を一気に削ぎ落とされる。

——なんて目してやがる

落ち窪んだ目の中は墨汁をこぼしたように真っ黒に染まっていた。

彰は慄きながらも何かの目の病気だろうと考え、深呼吸をして気の静まるのを待った。

「このカニ、北海道産なんだって」

「ほお……そうか、どれどれ、ほおうまそうやな」

「そ、それでつしやる……」

彰は爺さんの不気味さにすっかり氣勢をそがれていた。

爺さんを見るときは、できるだけ、目を見ないように顎の辺りに視線を置くように心がけた。

そうしないと、あの黒目の中の暗黒に引きずり込まれそうな気がしたからだ。

——目は気にすんな、カニさえ売ってしまえばいいんや

自分がヤクザだということを己に言い聞かせ、ドスの聞いた声を

張り上げた。

「たったの100万円やで！ このへんじゃこないいいカニ手にはいらん！」

「そうやな、そうやな」

黒目の爺さんも、老婆と顔を見合わせながら陽気に笑っていた。雰囲気は悪くはなかった。

「どうしようか、母さん」

「父さんがええんなら」

商談は円満にまとまりかけていた。

爺さんのほうも、妻の一言で購入に傾きかけていた。だが——そんな時、奥の間からまた誰かが出てきた。

「雅夫君、おったんかいな」

「ええ……朝からおりましたよ、お父さん」

ひよろつとした背の高いめがねをかけたリーマン風の男。

白いワイシャツにネクタイを締めて、頭の髪は7、3分けにしてある。

お父さんと言ったところを見ると、この婆さんの娘の婿さんだろ
うか。

彰はそんな風に予測を立てながら、少々面倒くさくなってきてい
た。

「息子はんでつか」

「ええ……」

息子は彰と顔を合わせようとしなかった。

何か疑わしく思ってるのだろうか。

——次から次から良く出てくるわ……平日の昼間やで……

今の形勢はとも彰にとっても良いものではなかった。

婿さんまで出てくるとは考えていなかった。

——この婿がなんか言えば、商談は潰れる……

そんな彰の心配をよそに、息子は体を左右に振りながらカニが入

っている箱の前に立ち止まった。

箱の中の力二を見るわけでもなく、宙をぼんやり眺めている。体は相変わらず左右にふらふら揺れていて、眼鏡の奥の瞳は虚ろに濁っていた。

——頭いってもうたんか？

だが、不意にその虚ろな目が、彰の思考を呼んだかのようにぎよろつと彰の顔に向けられた。

「うまそうやな……」

気持ち悪い媚は台所に消えて数分が経った。

だが、その後、またあの奥の隙間の闇から人が現れた。

エプロン姿で長い髪を後ろで一本に髪をまとめている三十代と思しき女性。

顔色は夫と同じく青白いが、目だけが妙にぎよろつとしている。

「お、奥さんですか」

「あ。ひ、あい」

ぶつぶついいながら、下を向いて何かを探すかのように視線を地に彷徨わせている。

さっきの息子の奥さんだろうと見当はつくが、彰はもうこの家に留まっていたくなかった。

——さっきから気持ち悪い連中ばかり、なんなんやこの家……言い知れぬ恐怖に彰は居たたまれなくなっていた。

「母ちゃん腹減った……」

襖の向こうの闇から、甲高い子供の声が届いた。

「静代か……こっちきて食わへんか……？」

老婆は優しく襖の向こうに声をかけると、

「……………」

前触れもなく、不穏な沈黙が辺りを支配した。

まるで、世の中の全ての音がどこか異界に吸い込まれたような、

深い静寂。

彰はその異変に気づき、中腰のまま周りの人間を見渡した。
なぜか老婆も主人も嫁もみんな、自分を見おろしていた。
薄気味悪い笑みを浮かべて、その獰猛な色を含んだ眼差しが彰の
顔に集まっていた。

蛇に睨まれた蛙のように彰は声を発することができずにいた。
そんな時、突然、襖の向こうの闇から何かが飛び出してきた。

「うわ、なんや」

すばしっこい紅い服をきたおかつぱの女の子があっというまに、
箱の中の力二をひつつかむと、

その力二をがりがりと言を立てて食い始めたではないか。

「うわ……わ」

彰は圧倒されていた。

と、気がつくと、台所からさっきの夫も戻ってきていた。
妻と並んで彰のほうを生氣のない目で見おろしていた。

「ヒ……ヒヒ」

足元で声がするので、視線を落とすと、老婆が蹲って黄色く変色
した乱杭歯を見せて笑っている。

「俺は、肉が欲しいから……」

「私も……」

彰を尋常でない恐怖が襲った。

彼らは彰以外見ていないのだ。

——肉ってなんや、それにこの異様な……

「いた……」

不意に彰は足に激痛を感じた。

視線を移すと、自分の足の脛の辺りを、ジーパンの上から少女が
歯を剥いて噛み付いていた。

「こら、なにしゃがるんだ」

「ヒヒ」

「は、離せよ、おい」

右足を振り回すと、少女の鋭い歯が肉に食い込み、赤い血の滴りが玄関に散った。

「ぎゃああ……なにしゃがるんや」

彰は身の危険を感じて少女を蹴り飛ばすと、ほうほうの体で背後の扉をあけて外へ逃げ出した。

「誰かおらんか」

彰が出て行った後、奥の間から年老いた女性の声が響いた。だが、玄関は暗闇に沈み人の気配はすっかり消えていた。

奥の間には老婆が布団引いて横になっていた。

その側にあの白い猫が丸くなって寝ている。

「にゃあ」

「ミケ……お前がおったな」

半身を起こして、女性は仏壇の前に座った。

老婆は仏前で手を合わせた。

そこには既になくなった夫、そして事故で命を落とした、娘婿とその子供たちの遺影が飾られていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4510q/>

火車が棲む家。

2011年1月27日18時10分発行